

しつけ場面における母親のたたく行為とその規定要因に関する臨床心理学的研究

～STAI得点、生育歴、育児観との関連～

心理臨床学専攻 折 見 綾

1. 研究背景と目的

近年、様々な側面から子どもと子育て家庭を取り巻く環境は大きく変化してきている。2005年現在、合計特殊出生率が1.289となり少子化傾向が続く中、核家族・少子家庭で育ち、わが子を持つまで乳幼児と接触する機会がほとんどなかった母親たちが親となる時代が到来した。また、虐待にまでは至らないものの母親の多くが、育児不安を抱えながらつい子どもを厳しくしてしまうことが報告されている。加えて、虐待の中でも、身体的虐待は「子どもをたたく」という行為で主に行われ、育児におけるしつけと虐待を区別することは大変難しいといえる。

育児場面で母親が子どもをたたくことは子どもの成長のためにしつける手段という側面も大きいと捉えるが、虐待などのケースの中には「しつけのつもりだった」と言われることもある。

そこで、本研究では、母親が子どもをたたきなくなるとき、それが行き過ぎたしつけに繋がるには、母親自身のより感情的な心理状態が大きく影響すると考える。さらに、母親が子どもをたたきなくなることへ影響を与える要因として、母親自身の不安状態の高さやスキンシップ経験に対する母親自身の主観的認識の少なさ、しつけのためにたたくことが必要であるとの育児観の関与が考えられる。

これらの仮説を検討するとともに、現在育児中である、特に就学前児童を持つ母親のたたく行為に影響を与えるものを見出し、心理臨床学的援助に繋がる視点を得ることを目的とする。

2. 研究方法

鹿児島市内に在住し（2ヶ所の保育園に通園する）、3歳児以上の就学前児童をもつ母親177名を対象に質問紙調査を行った。2006年5月に質問紙を配布し、回収には約2週間の期間をおいた。

有効回答率は59.32%で、対象年齢は21－46歳（平均33.68歳、SD 5.793）であった。

質問紙は、①無記名式のフェイスシート、②不安状態（新版STAIを参照）、③育児場面でたたきとなる場面、④たたく行為への関連項目、⑤育児観、⑥生育歴（たたかれ・ほめられ・スキンシップ経験場面）、⑦生育歴に関する関連項目から成るものである。

分析は、全質問項目の平均・分散・標準偏差を算出し、さらに、質問紙の③と⑥の尺度ごとに因子分析を行い、各因子同士や②④⑤⑦との相関を算出した。

3. 結果と考察

1) 平均値・標準偏差・度数分布

状態不安（平均値43.77 SD=9.333）、特性不安（平均値43.57 SD=9.436）に関して、状態不安高群は12名（8.6%）、特性不安高群は16名（10.5%）であり、わずかに特性不安の割合が高かった。さらに「しつけのためにたたくことが必要であると考ええる」（74.3%）、「必要以上に子どもをたたいてしまうことがある」（65.7%）との結果が認められた。たたいた後の気持ちでは「すまないと思う」（50.3%）なども上位に挙げられたが、「しつけである」（41.9%）と考えている母親の割合も高かった。その中で、自分のたたく行為が必要以上である（27.7%）と感じる母親も見られ、さらに、母親自身が子どもをしかるときに、子どもにその理由が伝わっていないと思う（16.2%）との回答からも、たたく行為をしつけと捉えている側面も大きい。母親自身が子どもをしかるとき・たたくときに、その程度が必ずしも適切ではないと感じていることもあることが推察される。

2) 因子分析

質問紙の③⑥の尺度ごとに探索的因子分析を行い、得られた因子を参考にしながら確認的因子分

析を行った。最終的に、実際の子育てにおいて、たたきたくなる場面では、第1因子「教育的、母親と子どもの2者関係を越えたもの」、第2因子「感情的、母親と子どもの2者関係のもの」が得られた。たたかれ経験に関して第1因子「教育的要因」・第2因子「感情的要因」が得られた。これら共通した特徴的因子より、育児中にある母親がしつけとして子どもをたたき際に「教育的」「感情的」という側面が特有な因子構造である可能性が高いと思われる。また、ほめられ経験に関して第1因子「対人的・対社会的要因」・第2因子を「対自己的要因」、スキンシップ経験に関して第1因子「必要が生じた時の身体接触」・第2因子「習慣的で、より距離の近い身体接触」がそれぞれ得られた。よって、これらの因子構造より母親と子どもの間にあるほめられ場面・スキンシップ場面において特有の因子が得られたと考える。

3) 相関

(1)たたきたくなる場面因子「教育的、母親と子どもの2者関係を越えた関係」に関して、母親自身の教育的要因によるたたかれ経験やしつけのためにたたきが必要であるとの育児観の関与が認められたことから、より母親自身の客観的・理性的な状態がうかがえる。さらに、有意な水準ではないものの自身のたたかれ経験を「良い思い出」と評価する傾向と関連が認められたことより、母親が自身のたたかれ経験を評価することで、しつけのためにたたきが必要であるといった育児観が生じる可能性も示唆される。これより、たたき行為がしつけから虐待に繋がることの懸念もある中で、この関係は子どもが社会に生きていく人間として必要な能力や特性を学び、成長を育むための母親の関わりであるといえよう。

(2)たたきたくなる場面因子「感情的、母親と子どもの2者関係」には、たたかれ経験、また、不安になりやすいパーソナリティ傾向や必要以上に子どもをたたいてしまうこととの関連が認められた。しつける側の母親自身も一人の人間であり、日々の育児の中で感情的になってしまうことや、その育児環境も含めて不安状態に陥ることもあると思う。しかし、しつけとして母親が子どもをた

たきとき、母親自身が自分の感情を制御し難かったり、たたきことによる抑制や従服の側面が強く出すぎて子どもに修復のできないような心身の深い傷をつけるようになってしまうこと、このようなことが行き過ぎたしつけに繋がる可能性となると考えられる。母親のほとんどが子どもをかわいいと感じている割合も高かったが、しつけであると感じている母親も多く、「子どもをたたき行為」自体がしつけのために日常化される背景が示唆される。これには母親と子どもの2者関係ということも感情的になりやすさの背景に影響するものと思われる。

(3)各生育歴間の相関では、必要が生じたときの身体接触経験と、ほめられ経験には関連が認められたが、特に対人的・対社会的ほめられ経験との間、さらに習慣的でより距離の近い身体接触経験と対人的・対社会的ほめられ経験との間に関連が認められた。これらより、スキンシップ経験があると認識している母親ほど、全体的に自分のほめられ経験も強く認識していることがうかがえる。スキンシップ(身体接触)を通して、子どもが自分自身を受け入れられたと感じ、育児場面における母子関係のより深いコミュニケーションに繋がる可能性があると考えられる。

4. 全体を通して

本研究を通して、母親が子どもをしつけとしてたたきとき、感情的な状態であることが、行き過ぎたしつけに繋がる可能性があることが推察された。さらに、母親自身の自分のたたかれ経験への認識や評価が、子どもをしつける際に教育的で理性的な関係を支えるものになることが推察される。

子どもをしかるとき、しつけをする側の大人として温かい愛情と、子どもとその将来を思う気持ちが重要なことであると考え。そして、感情的になりすぎることをのこさないよう、母親自身の自制心を育むと共に、育児への配偶者などの協力や様々な育児支援等を通して、母親の心身両面における育児負担の軽減を図る必要があると感じる。また、子どもが自分の行動を理解できるように、発達段階に応じた「ことば」での子育てが大切であるように感じる。